

伊丹交通史②「JR編」 伊丹に「軍用線」があった

荒牧バラ公園近くの天神川下にある小さなトンネルⅡ写真Ⅱを、かつて列車が走っていたことをご存知だろうか。

伊丹市の北部、県道中野中筋線と中国自動車道が交差する辺りから県道中野中筋線の北野1丁目交差点辺りにかけて大阪陸軍獣医資材支廠長尾分廠があった。また付近には、野里(宝塚市)、加茂・久代(川西

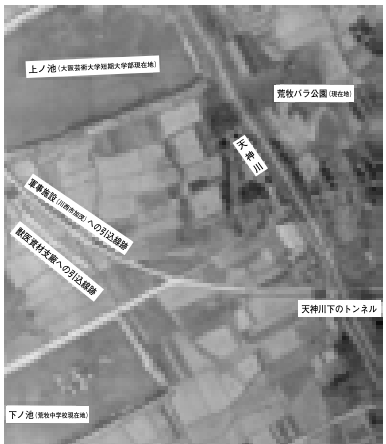
市)、大野(伊丹市)にまたがる地域に、大阪陸軍造兵廠川西補給廠があった。両者に対しては、国鉄(現JR) 中山寺駅から資材を運ぶための引込み線が引かれていた。JR中山寺付近の南側の地図を見ると、南東へ大きくカーブしている道があるが、それが線路跡である。

写真のトンネルは、中山寺駅から出て、途中で分岐して川西補給廠に向かう線路が、天井川である天神川を通過するため築造されたものであった。線路があった期間は短く、昭和20年(1945)初めに敷設され、同年10月には撤去されたという。

伊丹の鉄道の歴史は、明治24年(1891)、川辺馬車鉄道が伊丹駅と尼崎駅(のちの尼崎港駅、今は廃止)間で開業したのが始まりである。摂津鉄道として改称して明治26年に蒸気機関車の軽便蒸気鉄道に変更された。それから阪鶴鉄道に譲渡され、線路幅が762mmから1067mmへ改軌され、明治40年に国有化された。ちなみに国有化後、阪鶴鉄道の幹部は後に阪急電鉄となる箕面有馬電気軌道設立した。そして昭和62年に国鉄からJRとなり、今に至っている。

川辺馬車鉄道時代には尼崎(廃止)、大物(廃止)、長洲(廃止)、今のJR尼崎駅付近)、塚口、伊丹南口(廃止)、伊丹の駅があった。

伊丹南口という駅は今はないが、当時と路線はほとんど変わらず、この電車が行き交う路線に馬車が走っていたなんて、今では想像もできない。進化を続ける福知山線(JR宝塚線)は、今後も伊丹の発展に寄与することだろう。(細尾哲也)



昭和31年撮影の航空写真

伊丹南口という駅は今はないが、当時と路線はほとんど変わらず、この電車が行き交う路線に馬車が走っていたなんて、今では想像もできない。進化を続ける福知山線(JR宝塚線)は、今後も伊丹の発展に寄与することだろう。(細尾哲也)



平成いたみ八景⑧ 新緑の緑ヶ丘公園

桜が散ったと思ったら、瞬く間に新緑が眩しい季節となった。緑ヶ丘公園は四季を通じて美しい。市内外から訪れた人は、まず下池の中に浮かぶ亭「賞月亭」に見入る。

亭は東屋のことで、中国では古くから官僚や文人が庭園に組み込んで、ここから池に咲き誇るスイレンを眺めていた。

緑ヶ丘公園の亭は、伊丹市と国際友好都市提携している佛山市から平成2年(1990)に提携5周年を記念して贈られた。一辺が4軒の六角形。瓦や大理石など資材はすべて中国から運んできて建設され、水面に映る姿は中国を彷彿させる。

また、この下池と上池の間に純日本建築の鴻臚館がある。建物は純日本風だが、名前は中国風である。中国では、西域から仏教を学んで帰国した僧侶たちに鴻臚寺を建てて宿泊させたが、本来、役所や官舎であった寺が仏教寺院を意味するようになったのはその時からのこと。以来中国では鴻臚館は、外国の要人を宿泊、接待する場所となった。

伊丹の鴻臚館は、市内在住の大王、左官、建築師ら技術功労者として表彰された人たちの技術の粋を集めて昭和59年(1984)に建築されたもので、国際交流のため、そして茶会など文化的行事などに活用されている。

上池のほとりの桜、紅葉も素晴らしいが、なんとと言っても約50種400本の梅はこの公園の最大の見所である。観梅と野点の会は多くの市民が待ち望む恒例の催事であった。

ところが梅の一部に「輪紋病」の感染が見つかり、全ての梅が市民に惜しまれながら伐採されてしまった。見た感じでは樹勢は旺盛で昨年以上に花を付けていて、今年の観梅に訪れた人数は例年以上に多かったように感じた。

緑ヶ丘公園は昆陽池公園や瑞ヶ池公園とはまた異なった趣があり、特にその新緑に輝くこの公園は市民によって「平成いたみ八景」に選ばれた。(いたみアピールプラン推進協議会 会長 山元龍治)

郷土史こぼれ話⑧ 久々にベビー誕生？ 昆陽池の白鳥夫婦が求愛行動

白鳥が山口県宇部市の常盤公園から伊丹にお輿入れしたのは、昭和38年(1963)である。最初に緑ヶ丘公園の池に来た10羽の白鳥は、10年後には48羽に増えた。

その年、昆陽池公園が都市公園として完成し、白鳥たちが移されると、野鳥愛好家らが早朝からカメラの放列を敷くなど、園内は人々であふれかえった。毎年ひなはかえったが、白鳥は風切り羽を切られ飛べなかつた。

「羽を切るのをやめ、自由に飛ばしてやってほしい」。市内の寿司屋の若主人が、時の市長に手紙を出した。その願いがかなって白鳥は大空を飛びまわった。猪名川町、宝塚市、西宮市はおるか大阪湾、紀伊水道まで飛んだ。「白鳥を分けてください」との依頼が、全国から殺到した。自治体、温泉地、遊園地、ゴルフ場…。

手元の資料を繰ると、親善大使になった白鳥の数は170羽を超える。姉妹都市、長崎県大村市に送られた白鳥は、佐賀県の池まで飛んで住み着いた。どこでも可愛がられ人気者になった。

NHKをはじめテレビは毎年、昆陽池を全国中継し、市民はそれを誇りにした。わがまちのラジオ局エフエムいたみの市民レポーターが、移り変わる自然の景色とともに、今年の白鳥のひなは何羽、と伝えていたのが小冊子に残る。

その白鳥に変化が表れ始めたのは、10年ほど前から。近親交配が進み、営巣しても無精卵が増えてひながかえらない。

また世界的に水鳥のインフルエンザが問題になった。宇部市は常盤公園の白鳥やカモ類を一羽残らず殺処分した。平成12年(2000)のことである。

昆陽池の白鳥は現在、22羽。つい最近、頭を突き合わせる愛の行動が見られたと新聞に報じられた。今年こそ、ひなをかえしてね。頼むよ白鳥さん。市民の皆様も温かく見守ってください。

(郷土史研究者 森本啓一)

賞しニュース



作品を手を受賞を喜び一瀬さん

入賞作品

ことば蔵はこのほど、手作りのしおりの出来栄を競うオリンピック「しおりんピック」を開催した。受賞作品は4月、市内全館で図書館利用券新規登録者へプレゼントされた。

昨年10月12日から1月18日まで募集した結果、北海道や大分県など全国から353作品の応募があった。応募作品をことば蔵で展示し、来館者の投票によって、愛知県名古屋市のあいち造形デザイン専門学校高等課程3年生、一瀬真奈さん(17)の作品が金メダルに輝いた。

4月29日の表彰セレモニーに出席した一瀬さんは「修学旅行先の沖縄で受賞の報告を受け驚いたが、周りにいた友人か

第1回しおりんピック 全国353作品の頂点決まる

ら祝福してもらえてうれしかった。受賞作品はクラクションを工夫した自慢の作品」と話した。

「銀メダル」には新潟県燕市の中澤優恵さん(19)、「銅メダル」には同市の長谷川美奈さん(19)と神戸市西区の吉田禎夫さん(85)とがそれぞれ選ばれた。

また、入学・入社シーズンの4月に図書館利用券を新規登録した人へ数量限定で、受賞作品(複製)をプレゼントする登録促進キャンペーンを開催。かわいしおりで癒されながら読書できると好評だった。次回しおりんピックは11月から募集を開始する予定だ。ぜひ金メダルを目指し、応募していただきたい。